

流れの果てに 登場人物

- 小国おぐにかずま数馬 (3 5) 蘭方医の医者
- 浅井 浅太郎 (1 5) 浮浪児
- ひさ (1 2) 浮浪児
- うめ (3) 浮浪児
- 弥八|| 弥八郎 (7) 浮浪児
- 秀 (5) 浮浪児
- 蕎麦屋の女中 (4 3)
- 蕎麦屋の主人 (4 5) 名主
- 徳屋 紋兵衛 (5 8) 紋兵衛の娘
- おゆき (2 9)
- 京屋 甚兵衛 (5 9) 旅籠屋主人
- 勘兵衛 (4 4) 患者
- 三崎うえもののじょうまさちか右衛門丞正親 (4 2) 与力
- 利助 (5 8) 黒岩村庄屋
- とめ (4 8) コレラ患者の付き添い
- 作次 (5 1) 目明し
- 万作 (3 7) 百姓の患者
- 筑後屋与兵衛 (5 8) 薬種問屋主人

おちよ (27)

筑後屋の女中

堀田信正 (58)
のぶまさ

高岡藩国家老

高岡和興 (23)
かずおき

高岡藩世継
よつぎ

村部尚勝 (33)
むらべ なおかつ

藩剣術指南役

「流れの果てに」あらすじ

文政七年、文月中頃、街道を歩く武士一人。

この男、小国数馬はさる大名の家臣の次男坊。

次男故、親は本人の望みに任せ、藩に願い出て、長崎に蘭学を学びに行かせる。

蘭方医学を学んでいた矢先、藩がお家騒動でお取りつぶしになり、仕送りも途絶える。

長崎からの道々、宿場ごとに（体の痛み、お直し候）の旗を立て、流れ医者として生計を立てている。

その彼は、道中で知り合った五人の孤児を哀れに思い、一緒に生活する決意を。

高岡藩の城下町に入り、名主に頼んで一軒の家を借りる。

さらに女中を一人頼んだが、やって来たのは名主の娘、おゆきだった。

そこで医院を開いて二年。

突然、与力、三崎右衛門丞正親が訪ねて来て、海辺の黒石村にコレラが流行り、一緒に行つ

て対策を立ててくれと。

翌日、準備を整えた数馬は、三崎の用意した馬で村へ。

翌日三崎は城下に戻り、数馬はコレラ対策を。

そして三日後、彼は自宅に帰ってくる。

すると、子供の一人、秀が野武士の辻斬りで死亡していた。

彼は仇討ちの為、昼は診療、夜は、まだ野武士に襲われていない商家の前の仕舞屋で張り込み。

それから一年のある夜、その商家に賊が押し入り、駆け付けた数馬はその賊を倒す。

しかし、その敵の刀の切り口から、秀の仇は他にいると知る。

そんな折、与力の三崎が訪ねて来て、国家老の堀田の呼び出しがあると告げられる。

不審に思いながら登城した彼は、国家老の

堀田と面会し、彼に異常性格の世継、和興かずおきと、

剣術指南の村部尚勝むらべなおかつを切ってくれと頼まれる。

即座に断ったものの、その二人が秀殺害の

犯人と知らされて、引き受ける。

夜の城中、裏御門で待っていると、黒装束の二人が現れる。

前へ出て問いただすと、確かに秀殺害の張本人と知れ、切つてかかる数馬。

劍戟の末、二人を倒した数馬は、堀田に捕らえられ、牢に押し込められる。

翌朝斬り棄てられる数馬は万感の思い。

深夜、三崎が現れて助けられ城外へ。

そこで三崎が幕府隠密と明かされる、家へ逃げ帰る数馬。

一か月後、三崎が現れ、藩の改易が終わり、江戸に帰ると挨拶される。

三崎を見送る数馬。

流れの果てに

T 文政七年（1824）

文月中頃ふみづき

○田舎の街道

川沿いの街道を一人の武士が歩い

てい

る。

着流しに尻端折しよりり。

月代さかやきも剃らず、ざんばら髪。

胴深笠を手に、背しに背負子よいこ。

その背負子には挟み箱くくを括くくつてい

る。

またその上に風呂敷包み。

腰に大刀一本。

立ち止まり、懐の手ぬぐいで汗を

拭く。

小国おぐに数馬かずま（35 蘭方医の医者）

「熱いのう、たまらん」

N 「この男、小国数馬は関東のさる大名の

家臣の次男坊。

次男故、親は本人の望みに任せ、藩に願
い出て、長崎に蘭学を学びに行かせる。
蘭方医学を学んでいた矢先、藩がお家
騒動でお取り潰しになり、仕送りも途
絶える。

本家も職を失い離散し、父も側室の子
を押した国家者に加担したため手打ち
に。

最後の手紙で、新藩主の旧藩の残党狩
りが始まっているから、故郷には、帰る
など。

長崎からの道々、宿場ごとに（体の痛み、
お直し候）の旗を立て、流れ医者として
生計を立てている」

○河原

数馬は、草の茂みを抜けて、石ころ
ばかりの川の縁にやってきて、背
負子を下ろし、太刀を立てかけ、帯

を解いて禪かんとし一つになる。
そして川に入つて水浴び。
ふと、足音に気づき、河原を見ると、
五人の子供が背負子を盗んで逃げ
ようとする最中。

数馬「こらあ、待てえ」

怒鳴るが早いか、水から上がって
駆け付ける。

小さい3歳くらいの女の子がつま
づき、

倒れて大声で泣き出す。

追いついた数馬。

数馬「こらっ」

女の子は一段と大きな声で泣く。

しゃがんで戸惑う数馬。

数馬「おい、泣くな。」

乱暴はせんから」

先を逃げていた四人が、恐る恐る
近づいて来る。

一番年かきの男子が手に竹を構え

て、

浅あさ（15）「おい、そいつに近づくな！」

数馬「何もせんと言うとるだろう。」

なぜ盗んだ」

浅「・・・食いもんが欲しい」

数馬「なんだ、そういうことか。」

それならそれと言えばいいのに」

浅「言ったら呉れるか」

数馬「やるとも。」

その背負子を持ってこい」

おそるおそる近づく浅。

数馬、もってきた挟み箱の蓋を開

けて、木綿の袋を取り出す。

そして中の干ほし飯しいをひとつまみ。

数馬「ほら、食べてみろ」

浅、恐る恐る近づき、それを受け取

って口に入れる。

浅「うわっ、硬い！」

数馬「なんだ、食べたことないのか。」

これは飯めしを干したものだ。

口の中でしばらくかき回しておると、

潤ほとび

てきて、味が出てくる。

どうだ」

浅「やっぱり硬い」

数馬「仕方がない。

ちよつと待っておれ」

数馬、着物を着て、大刀を手に近く

の

竹やぶに行き、刀を抜いて、三尺の

竿

を三本切る。

戻って来て、その三本の竿を河原

に三

角に立て、やはり挟み箱から紐を

取り

出し、竹の上部をまとめて縛り、そ

の先に紐で自在鉤かぎをひっかける。

さらに背負子に引っ掛けていた小

さい鍋をつかみ、川の水を汲んで

きて、鍋の二つの持ち手を自在鉤
に吊るす。

数馬「さて、あとは火だ。

おい、薪を集めてこい」

年かきの三人が駆けだして行く。

数馬、袋から干し飯を五つ掴んで

鍋の中へ。

さらに塩を振りかける。

そして木の杓しゃもじ文字を取り出し混ぜ

る。

そこへ子供たちが薪を抱えて戻っ

て

くる。

数馬、またも挟み箱から小さな袋
を取り出し、そこから麻の繊維の
丸まったものを摘まむ。

それを鍋の下に敷いて、火打石と
打ち金で火花を。

燃え上がった麻の上に枯れた小枝
を乗せ、火を大きくしてゆく。

さらに少し太い枝を差し入れる。

火は燃え盛り、鍋を温める。

数馬「どうだ、もうすぐ飯が出来る」

浅「へえっ」

数馬「お前、名は何という」

浅「あさだ」

数馬「よし、浅。

少しづつ薪をくべろ。

おい、お前」

おひさ（12）「あたいたい？」

数馬「そうだ、お前だ。

名は何という」

おひさ「ひさ」

数馬「そなた、この杓文字でときどき鍋を

ゆっくりかき回せ」

と杓しゃもじ文字を渡す。

数馬、見るともなく隣の女の子の

髪に目をやり驚く。

数馬「おい、なんだ、その髪は！

シラミがうようよと。

これはいかん。

ちよつとこつちに來なさい」

数馬、さつき泣いていた女の子の手を引いて川の中へ。

数馬「今から髪を洗ってやるから、耳を指で塞ふげ」
とやってみせる。

数馬「わかったか？」

おうめ（3）「うん」

数馬「よし、名前は？」

おうめ「うめ」

おうめの頭を川の流に近づけ、流にそよぐように髪を洗ってやる、

シラミの大群が、それからそれへと流れてゆく。

しはらく洗って、体を起こさせ、髪の中を入念に調べる。

数馬「よし、よかろう。（と手拭いで髪を拭う）

次、そこのお前」

弥八（7）「うん」

数馬「名前は？」

弥八「やはち」

数馬「さあ、お前もシラミ退治だ」

同様に頭を洗う。

数馬「次はお前」

秀（5）「ひで」

数馬「さあ来い」

以下同様に頭を洗う。」

それが終わると火に近づく数馬。

数馬「もう少しだな。」

よし、おひさ。

お前は一人で頭を洗えるな？」

おひさ「うん」

数馬「洗ってこい」

おひさ「うん」

数馬「浅、お前も洗ってこい」

浅も川の中に入る。

数馬「弥八、あそこの大きな葉っぱが見え

るな」

弥八「うん」

数馬「あの葉っぱを五つ千切ってこい」

弥八「あいよ」

鍋の干し飯は、水を吸って、やっと
米らしくなり、鍋を火から下ろす。
おひさと浅が帰ってくる。

数馬「さあ、丸く座れ」

そして杓文字で米を掬^{すく}い、葉っぱ
に米を盛り、子供たちに分け与え
る。

数馬「さあ、食べる。

熱いから気を付けろ」

子供たちは、息で米を冷ましなが
ら、

味わうようにゆっくり食べる。

数馬「どうだ、旨いか」

おうめ「うん、うまい」

数馬「そうか、それはよかった」

と、自分は干し飯を口に。

おうめ「お替りは？」

数馬「鍋に少し残っている」

うめ、鍋に飛びつき、杓文字で米を集める。

秀「おいらも」

浅「秀、やめろ。」

おうめに食わせてやれ」

秀、悔しそうな顔で引き下がる。

おうめ「秀兄ちゃん、あげるよ」

と、杓文字の米を秀に渡す。

秀、浅の表情をうかがう。

浅「おうめがいいんなら」

秀、杓文字を受け取り、がつつく。

数馬「浅、お前はいいやつだなあ。」

みんなまことの兄弟か？」

浅「違う。」

みな俺が集めて来た。

一人で腹を空かせているところを」

数馬「そうか。」

親は？」

浅「いねえ。

みんな死んだ」

数馬「そうか・・・。

それにしてもどうやって食いつない
だ？」

浅「大百姓のところで芋ほりなんかを手
伝っ

て、その芋をもらった」

数馬「一年中、芋があるはずないが・・・」

浅「・・・その時は盗み食いをした」

数馬「捕まらなかったのか？」

浅「時には捕まって殴られた」

数馬「そうか」

数馬、何やら思案を巡らす様子。

そして、食べ終わった鍋と杓文字

を川

の水で洗う。

そして鍋に汲んできた水を焚火たきびに。

数馬「おお、待て待て。

みな裸足か。

そうか、それでは」

と、背負子に括くくっていた草鞋わらじを解き、

一人に一足ずつ渡す。

こうして身じまいを整え、街道に出で、

ぞろぞろと歩き出す。

○街道（未の刻二午後二時頃）

数馬「暑いのう。

ちよつと涼んでゆくか」

大きな松林の木陰で荷を下ろし座る。

子供たちも、それに倣ならう。

涼しい風が吹き抜ける。

そのうち数馬がいひきかき始める。

こっそり笑う子供たち。

その内、子供たちも寝てしまう。

半刻も過ぎたとき、数馬起きる。

数馬「おお、良く寝た。」

おい、子供たち、起きろ」

もぞもぞ起きだす子供たち。

数馬「浅、町までどのくらいある」

浅「半里ほど」

数馬「そうか、では行こう。」

それからな、わしは流れ流れの旅暮ら

しじ

やったが、お前らを見かけて、放っても

お

けぬ気持になった。

それ故、^{ゆえ}家を見付けて一緒に暮らそう

と思

うが、どうじゃ」

おうめ「うん」

秀「うん」

数馬「そうか、では、出かけよう」

と、立ち上がり、歩き始める。

○高岡藩川辺宿^{しゅく}の町はずれ

一行は一軒の蕎麦屋の前に差し掛かる。

数馬「少し早いが、夕餉ゆうけにしよう」

と先導して蕎麦屋の中へ。

数馬「通るぞ」

○蕎麦屋の中

蕎麦屋の女中（43）「へい、お越し。

どうぞそちらへ」

と大きな縁台に案内される。

数馬「小さいのがおるから、座敷に通って

もよいか？」

女中「はい、どうぞ」

子供たちが座敷にあがろうとする

と

数馬「まてまて、足を拭かねば。

そこに腰かける」

と、上がりがまち框を指さす。

子供たちが座ると、そばの雑巾で

足を

拭ってやる。

子供たちは座敷に上がり、横長の

座卓

の前に座る。

数馬も足を拭って座る。

女中「ご注文は？」

数馬「(壁のお品書きを見上げて) うん。

盛り蕎麦にしよう。

盛り蕎麦六つ」

女中「へーい。

盛り蕎麦六つご注文」

程なく、蕎麦と蕎麦汁つゆが運ばれて

くる。

横にねぎとショウガの薬味。

子供たちが食べようとすると、

数馬「(両手を合わせ) 頂きます」

子供たち、手を合わせて唱和。

数馬「さあ、食べる」

猛然と蕎麦をすすり込む子供たち。

あっという間に食べつくす。

数馬「旨かったか」

おひさ「おいしかった」

数馬「では、ごちそうさまでした」

子供たちも唱和。

数馬「おい、勘定じゃ」

女中「へーい。

えーっと、一人分十六文で、六人だから・・」

おひさ「九十六文」

数馬「えっ？ 算用が早いの。

どこで習った？」

おひさ「父が寺子屋をしておりました」

数馬「ああ、なるほど」

女中「ちよっとお待ちを。

えーっと、旦那」

主人（45）「なにをもたもた。

その娘さんの言う通り九十六文だ。

どうもすみません。

気の利かないことで」

数馬「いやいや、わしも一瞬判らぬように

なつた。

では、これで」

と錢袋から四文錢を拾いだし始める。

数馬「えーつと、九十六文だから、四文錢何

枚か・・・」

おひさ「二十四だよ」

数馬「ほう、そうか。

そなたは賢いの。

ところで、(蕎麦屋の亭主に錢を渡しながら)この町の名主なぬしはどこに住んでおる」

主人「へい。

この道をまっすぐ行くと、角先に丸に徳の

字の提灯が二つ並んだ家がございます。

そこが徳屋紋兵衛の家にござります」

数馬「わかった。

おい、行くぞ」

と子供たちをせかせて店を出る。

○町の街道

一行がしばらく行くと、言われた通り

の提灯の下がった門構えの家。

○紋兵衛の門の中

障子の引き戸を開けて

数馬「頼もう」

○紋兵衛の家の中

そこへ一人の男が出てくる。

紋兵衛（５８）「へい、なにか御用で」

土間の中に入る数馬。

数馬「お手前が紋兵衛殿か」

紋兵衛「へえ、左様で」

数馬「実は一軒家を借りたいのだが」

紋兵衛「へい、どのような家を」

数馬「（後ろに居並ぶ子供を指して）この

子らと一緒に住めるような適当な家が
所望じゃ」

紋兵衛「おお、これはお盛んなことで」

数馬「これ、間違えるでない。

この子らは、わしの子ではない。

街道で腹を空かせていたのを哀れに思
い、

引き取ってやろうと連れて来たのじゃ」

奥の襖ふすまの影で一人の女、おゆき（2

9）

がこの様子を窺うかがっている。

紋兵衛「おや、左様で。

そうですねあ。

あ、一軒開いた家がござります。

一度ご覧になりますか」

数馬「うん、そうじゃのう」

紋兵衛「では、早速」

数馬「店賃たなちんはいかほどだな」

紋兵衛「月六百文でござります」

数馬「わかった」

紋兵衛、草履をつっかけて表へ。
ついて行く数馬一行。

○街道から一本逸れた川沿いの細道（夕方）

通りから三軒目の家に行きつく。

○古びた一軒家・外観（夕方）

紋兵衛「こちらにござります」

紋兵衛、開いた板塀の間から中へ。

○家の中（夕方）

入り口の左に、二連のかまどと流
しと、

水瓶。
みずがめ。

土間の正面は、六畳ほどの板の間。
その奥にやはり六畳ほどの畳部屋。

紋兵衛「如何でございましょう」

数馬「うむ、あの戸棚の中は？」

紋兵衛「布団でございますよ」

数馬「ん？ まさか布団はあるまいなあ」

紋兵衛「それが旦那様、博打で負けて、あ

わ

てて夜逃げしましたので、そのまま残

って

おります」

数馬「おお、それは重畳。

家の根太も柱もしっかりしておる。

借りるぞ」

紋兵衛「有難うございます。

それでは書面を作りますによって、当

家迄

お戻りくださいませ」

数馬「ちよつと行ってくる。

もう表に出るでないぞ」

浅「うん」

数馬、紋兵衛を伴って表へ。

○紋兵衛の家の土間（夕方）

紋兵衛「あなた様のお名前、お子様方のお

名前、しかと控えさせていただきま
した。

ところであなた様のお仕事は？」

数馬「医者じゃ」

紋兵衛「ああ、それは有難い。

この辺には医者がいませんので」

数馬「そうか、それでは、店賃を渡す」

と懐から錢袋を取り出し、小判一
両を

渡す。

紋兵衛「これはご念の入りましたことで」

と、証文をしたためる。

紋兵衛「ありがとうございます」

数馬「足りなくなったら言ってくれ。

ところで、このあたりに口入れ屋はあ
るまいか」

紋兵衛「と申されますと？」

数馬「先程見ての通り、子供五人、特に
女子おなごの世話は、わしには荷が勝ち過ぎ
る。

そこで、お女中を一人雇いたいのだが」
紋兵衛「ふーん、なるほど・・・。

えーつと、あつ、あの、一人心当たりが
ございます。

明日にでも連れてゆきます故、ご検分
を」

数馬「左様か、では明日」

○数馬の家（夜）

畳の部屋に二枚の布団を敷き、そ
こにおうめと、おひさ。

板の間に男の子と数馬の四枚の布
団。

数馬「良く寝るのじゃぞ。

表の廁かわや（トイレ）へ一人で行けるか。
行けねばわしを起こせ。

では」

と横になる。

しばらくすると鼾いびき。

そして子供たちの寝息も。

○同・土間（朝）

数馬が竈かまどに火を起こしている。

おひさが、釜を用意する。

おひさ「何を入れるの？」

数馬「干し飯と思うたが、まてまて。

（戸棚の下を覗き込み）ああ、栗あわがある」

栗の入った壺を引き出して、鍋に
適量入れる。

数馬「おひさ、三度ほど栗を洗って、それ

か

ら水をここまで入れて、釜に蓋をして、

ぷ

うっと湯気が吹きあがるまで炊け。

炊きあがったら火を落とせ」

おひさ「うん」

数馬「浅、表に大根が植わっておったな。

二本ほど抜いてこい」

浅、すぐに表へ。

暫くして、洗った細い大根を持つ

てくる。

数馬「そのこの包丁で皮を剥いて、食べやすい大きさに刻め」

浅「うん」

小さい三人がまな板を覗き込む。

浅、器用にさばいて、戸棚から二枚の皿を見つけて、それに盛る。

そのとき釜もプウツと吹き上がる。

数馬「しばらく蒸らすのじゃ。

その間に、布団を干そう。

おい、自分の寝た布団を持ってこい」

それぞれ上にあがり、布団を引っ張ってくる。

○同・家の表（朝）

物干し竿に布団を掛ける数馬と浅。

数馬「今日も晴れだのう」

と一つ伸びをする。

おうめと弥八もまねをする。

○同・家の中（朝）

小さい卓袱台ちやぶだいに、六人がひしめき合つて食事。

見付けた味噌をつけた大根を噛む
コリコリという音。

栗を噛むときのニシニシという音。

数馬「夏大根にしてはうまい」

おうめ「うまい」

数馬「これ、真似をするな」

おうめ「これ、真似をするな」

数馬「もういいと言うに」

おうめ「もういいと言うに」

数馬「いい加減にしろ」

おうめ「いい加減にしろ」

数馬、笑い出す。

子供たちも笑い出す。

数馬「参った、参った」

子供たちみんなが

全員「参った、参った」

と大笑いになる。

○同・庭先

数馬が長い竹の先端に丁字に細い竹を組み、道案内ののぼりを張っている。
のぼりには

「痛いところお直し候

蘭方医 小国」

家の傍の厠かわやには子供たちが列をなして順番を待っている。

数馬「子供五人に厠一つでは・・・」

その時、二人の若い衆が大八車に荷物を積んで庭先に。

その後から紋兵衛と一人の娘が。

その娘、地味な着物と帯。

髪は鬘まげを結わず、長いまま束ねている。

紋兵衛「小国様、お早うござります」

数馬「おお、徳屋さんか。

こんな朝早くに何だな」

紋兵衛「手伝いを連れてきました」

数馬「ええっ、もう？」

紋兵衛「これ、おゆき、ご挨拶を」

おゆき「お初に御目文字致します。

ゆきと申します」

数馬「えっ？」

徳屋さん、この人が昨日の話のお女中

か？」

紋兵衛「はい」

数馬「いやあ、このような見目麗しきご婦

人

とは！」

おゆき「小国様、初見で斯様なことを申し

ますのも憚られますが、女子の値打ち

は見目形ではござりませぬ。

いかな醜女なりとも、一芸に秀でた

女子は

数多おります。

どうぞそのところを御了見頂きます

ようお願いいたします」

紋兵衛「これ！

何ということを！

またやっつてしもうた！」

数馬「かまわん、かまわん。

そなたの言う通りじゃ。

拙者が不心得じゃった。

許せ」

紋次郎「小国様、ちよつとこちらへ」

と数馬の袖を引いて板塀のそばへ。

紋兵衛「あのおゆきをこちらに伴いましたに

ついては、仔細がございます。

あれは私共の娘でございます。

あれは先日まで、さるお店の女房でござ

いました。酒乱の夫を引っぱたい

て、その日の内に離縁させられました。

本人は清々したとのんきなもので。

とは言うものの。当家ではまだ長男に

嫁を

取ってはおらず、出戻り後家が家に居

座っていては、成る縁も成らないこと
となります故、ここを先途せんととこちら様
に奉公させていただきたいと思いまし
た次第で。

お会いした最初の一言であのような無
礼を申し上げ、誠に申し訳ありませぬ。
この上は、連れて帰りとう存じます」

数馬「徳屋さん、それは違う。」

あの拙者の物言いは、間違っております
した。」

誠に立派なご息女を育てられました。

そちらさえご購入なら、どうぞ家の内
を切

り盛りしていただければありがたい」

紋兵衛「え？」

それではお許しただけなのです
か？」

数馬「許すも許さぬも無い。」

こちらからお願い申す」

紋兵衛「ああ、それはそれは。」

ではお言葉に甘えて早速」

と、大八車の男衆に声をかけ、荷ほど

きを命ずる。

数馬「え、その荷物は」

紋兵衛「おゆきの身の周りのものです。

さあ、鏡台を落とさぬようにな」

数馬「え、通いではないので・・・」

紋兵衛「住み込みでございます。

子供衆五人も居ましては、それではなくては

家が回ってゆきませぬ」

数馬「はあ」

○同・家の中

鏡台と柳行李やなぎこうり二つが畳の間に運ばれる。

子供たち物珍しそうにその様子を

窺うかが

う。

おゆきが上がって来て子供たちに
声を掛ける。

おゆき「あなたたち、名前は？」

順番に名乗る。

おゆき「そお、今日からお世話になります。
ゆきと申します。

仲よくしまししょうね」

おうめ、鏡台のところへ行き、懸け

布

をめぐって、驚く。

おうめ「うわあ、鏡だ」

おゆき「ほら、こんな風に毎朝髪を整える
のよ」

と引き出しから櫛を取り出し、お

うめ

の髪をくしけずる。

おひさ「私も！」

同じくおひさの髪も整えるおゆき。

おゆき「ほら、奇麗になったでしょう」

おうめ「うん」

それを眺めていた紋兵衛と数馬。

紋兵衛「それでは、わたくしはこれで失礼
さ

せていただきます。

どうぞ良しなに」

数馬「いや、まことにかたじけない」

紋兵衛「あの、小国様。

その旗竿、街道の入口に懸けて置きま
しよ

うか？」

数馬「あ、これか、頼めるかのう」

紋兵衛「街道の角の店は、わたくしの店子
で

ございますから、容易たやすいことでござり
ます」

数馬「いやあ、すまん、すまん」

と旗竿を手渡す。

数馬「ついでと申してはなんだが、徳屋殿、
ご存じ寄りの大工はおらんかの」

紋兵衛「はて、なにかこの家にご不満でも」

数馬「不満は無い。」

ただ一つ、あの厠だ。かわや

七人が暮らす家に厠一つでは、ちと不便で

ある。

もし患者が増えてここに来ればもっと足りなくなる。

故に厠を建て増ししたいと思うのじやが」

紋兵衛「ああ、なるほど。」

承知しました。

今日中に声を掛けておきます」

数馬「すまん」

紋兵衛「では」

と若い衆と出てゆく紋兵衛。

○同・家の中

子供たちは表。

おゆきが小さい箆笥の中、食器戸

棚や

床下の壺などを点検。

数馬「ああ、おゆき殿、そんなに根を詰めなくてもよい。

ゆつくりなされ。

ちと話がある。

こちらへ来られい」

おゆき「はい、何でござりましょう」

数馬「そなたの給金の事じゃ。

いかほど渡せばよろしいかのう」

おゆき「あの、父からお聞き及びではござい

ませんか」

数馬「いや、なにも聞いてはおらんが」

おゆき「さようですか。

あの、お給金は要りませぬ。

食事さえできればそれだけで」

数馬「いや、それではすまぬ」

おゆき「いえいえ、あのかわいい子供たちと

共に暮らせれば、それだけで」

数馬「変わった御人^{おひと}じゃのう。

うん、それでは」

と、懷から錢袋を取り出し、卓袱台^{ちゃぶだい}に

錢を全部広げる。

小判が三十枚ほどに、一朱銀や一

文錢、

四文錢がうじやうじやと。

それを種類ごとに二等分する。

そして、その半分をおゆきに差し

出す。

数馬「これをそなたに預ける。

好きなように使ってくれ。」

おゆき「まあ、こんなに」

数馬「旅先で治療した武家や分限者^{ぶんげんしや}からもろ

うた錢だ。

多すぎると申したが、聞き入れず、こちら

も手元不^ふ如意^{にょい}ゆえ、有難く頂戴した。

不浄の金ではない」

おゆき「わかりました。

大事に使わせていただきます」

数馬「あ、これはまさかの用向きに」

と、残りの銭を袋に入れ、懐に。

おゆき「（笑いながら） まあ」

数馬「もう一つ頼みがある。

あの子供たちの着物だ。

破れていたり、汚れていたり。

それでこの町に古着屋があるのなら、

一人頭あたま二着揃えてもらいたいのじゃが」

おゆき「よくそこまで気がつかれました。

さっそく連れて買いに参りたいと存じ

ます」

数馬「そうしてくれるか。

それでは頼む」

おゆき、草履を穿いて外へ声を掛

ける。

おゆき「あなたたち、出かけますよ」

子供たち、飛んでくる。

数馬「ああ、それから履物はきものじゃ。

草鞋わらじではすぐ履きつぶしてしまふ。

ちゃんとした下駄せうりか草履せうりも頼む。

あ、それから房楊枝ふさようじも二十本ほど」

おゆき「はい、それでは行ってまいります」

数馬「浅、その背負子を持って行け。

買い物があるからの」

浅「あいよ」

そうしてみんな出てゆく。

数馬、おもむろに立ち上がり、小刀と矢立やたてを持って表に。

○同・家の入口の塀の前

数馬、小刀で表の板塀の眼の高さの板を削りだす。

黒く汚れた木の表が削られて白い

地肌

が現れる。

そこに墨で（蘭方医 小国）と書く。

○同・家の中 巳の刻・四ツ半（午前十一時）頃

数馬が板の間で挟み箱の整理をしている。

そこへおゆきたちが帰ってくる。

数馬「おお、帰ったか」

おゆき「只今戻りました。」

八百屋へ寄って麦や野菜や醤油も買うてま

いりました」

数馬「おう、そうか。」

それは念の入ったことだ。

ありがたい」

おうめ「あたいの着物だよ」

と手に持った着物を広げて見せる。

数馬「ほう、なにか縫いたてのようだな」

おゆき「古着でもこれが一番ましでした」

浅が背負子を下ろし、荷を上がり

框がまちに

並べる。

おゆき「古着屋でこの子たち、あれでもない
い

これでもないと、大騒ぎ」

おひさ「うれしかった。

生まれて初めて着物をもらった」

数馬「それはよかった」

おゆき「お饅頭とお茶も買うてまいりました。
した。

茶を立てます程に、しばらくお待ちを」

数馬「いやあ、それはわしがやる」

と土間に降りて、かまど竈に近づき、稲わらに

火を点けて、柴を燃やす。

鉄瓶に水を入れて竈に掛ける。

おひさ「あたいが火を見てるから」

数馬「そうか、それでは」

おゆき、棚から形のそろっていない

い茶

碗を七つ取り出し、洗い場で一度

洗っ

て、布巾でふき取る。

おゆき「ここに住んでいた人、いったい何人

いたのでしょうか。

食器も不揃いだし」

数馬「さあな。

だが、形はともかく使えるのはありがたい」

そうこうする内に湯が沸く。

おゆき、棚にあった大きな急須を

取り、

中に買ってきた煎茶を入れ、湯を

注ぐ。

しばらく置いて、板の間に上がり、茶碗に茶を注ぐ。

竹の皮をほどいて饅頭を取り出し、広げた皮に並べる。

おゆき「さあ、どうぞ」

子供たち、我先にと手を出す。

おゆき「お茶が熱いから気を付けて」

子供たち、ふうふう言いながら茶

を飲む。

数馬「旅先で茶も饅頭も食べたが、我が家に落ち着いての味は一入ひとしおじゃ」

おゆき「どれ程旅をなさったのでしよう」

数馬「長崎を出て二年。

帰る当てない旅は……」

つい涙が滲む数馬。

おゆき「数馬様、子供たちはあなた様のこと
と

を何とお呼びすれば」

数馬「そうさなあ」

おひさ「お医者じゃから先生に決まってる」

数馬「先生なあ。

川柳に（先生と呼ばれるほどの阿保あぼでなし）

とあるが……」

おゆき「先生でよろしいでしょう。」

あ、先生、患者さんがお見えです」

数馬「え？　もう？」

数馬、開け放たれた入口に。

数馬「はいはい、御用の向きは？」

京屋甚兵衛（59 旅籠屋）「お初にお目にか

かります。

京屋甚兵衛と申します。

あの、徳屋さんから教えていただいたので

すが、お医者様で？」

数馬「左様、小国と申します。

してどこが痛いので」

甚兵衛「昨日座ったところから立とうとした

ところが、ギクツと音がして、それから上を向くことが出来なくなりました。

何とかならないでしょうか」

数馬「なるほど。

ではこちらへ」

と、家へ招じ入れる。

おゆき、子供たちを表へ。

○同・家の中。

数馬「どうぞお上がりください」

数馬、先程干した布団の程度のいいのを一枚板の間に広げる。

数馬「どうぞここへお臥ふせに」

言われた通り甚兵衛横になる。

その顔を横に向けさせる。

そして、着物の裾を膝までまくり

上げ

それから両の膝の内側を、親指で

強く

抑え始める。

甚兵衛「うっ、こりやどうも」

数馬「どうですか、効きますかな」

甚兵衛「効くと言いますか、ズキズキと」

数馬「血の道が開いているのです。

しばらく続けましょう」

表からは子供たちの遊ぶ声が。

半時も経った頃

数馬「さあ、今日はこの辺で」

と着物の裾を戻す。

むっくり起き上がる甚兵衛。

甚兵衛「おや、大分楽になりました」

数馬「できれば、ここ二、三日は楽にして

腰を冷やすようになされ。

重いものを持ちあげないように」

甚兵衛「はい、ありがとうございます。

あの如何ほど差し上げれば・・・」

数馬「左様、百文頂きます」

甚兵衛「そんなに少なくてよろしいので」

数馬「薬が要るときは、もつとかかります

が、今日は薬はいいでしょう」

甚兵衛「へえ、それではお言葉に甘えて」

と懐から財布を取り出し、一朱銀

を四枚数えて数馬に渡す。

おゆきが冷ましておいた茶を持っ

てくる。

おゆき「どうぞ」

甚兵衛「あつ、おゆきさん。

こちらにご奉公とは誠だったのですね」
おゆき「はい、どうぞよろしく」

甚兵衛「こちらこそ。(お茶を飲み干して)
ではこれで」

数馬「いや、かたじけない」

甚兵衛「これからもどうぞよろしく」

数馬「こちらこそ、どうぞお大事に」

こうして甚兵衛は立ち去る。

数馬「この銭は、そなたが預かってくださ
れ」

と銭をおゆきに渡す。

T 二年後

○同・数馬の家(朝)

早朝だというのに患者が四人、土
間で上がりがまち框に座って待っている。
板の間の戸が開き、

数馬(38)「勘兵衛さん、お大事に」

勘兵衛(44)「へえ、ありがとうございます」

ます」

浅（18）「次の人」

と、その時、表で呼ばれる声が。

三崎右衛門丞正親（42 与力）「小国殿
は居

るか、小国殿」

○同・庭先（朝）

家から出てきた数馬。

数馬「何事でござりますか」

正親「そちが小国殿が」

数馬「左様にございます」

正親「拙者は奉行所の与力、三崎右衛門丞
正

親と申す。

そちは医者じゃな」

数馬「左様にございます。

それが何か？」

正親「コレラじゃ。

我が藩にコレラが出来しおった」

数馬「なんですと！」

正親「藩の海辺の村、黒石で」

数馬「あの、もしかして紅毛こうもう人がその村に」

正親「左様じゃ。

良く判るの」

数馬「長崎でも、コレラは外から入ってき

ましたによって」

正親「じゃから、そなたに見立てをお願い
し

たい。

これは国家老堀田様の直々のご指示じ
ゃ」

数馬「あの、他の医者はおられませぬか」

正親「この処置は御殿医の常和じょうわの進言に
よる

ものなれど、彼はいかんせん年寄りじ
ゃ。

黒石村に駆け付けることは出来ぬ。

頼む」

数馬「承知いたしました。

では準備いたしまする故、一日猶子を
賜りたく存じます」

正親「そうか、わかった。

お、そうだ、そこもとは馬に乗れるか」

数馬「はい」

○同・家の中

数馬「おゆき殿、聞いておられたか。

藩命じゃによつて、黒石村へ行かねば
ならぬ」

おゆき（31）「あなた様は藩の碌ろくを食はん
ではおられませぬに、行かねばならぬ
のですか」

数馬「そうは言うてもわしの仕事は医術
じゃ。

人助けじゃ、人助け

今から薬種問屋へ行つて、薬を整えて
くる。

あ、お待ちのみなさん、そう言う訳で本
日は診察を終えます。

誠に申し訳ない」
と頭を下げる。

T 翌朝

○同・家の表（朝）

馬上の正親、もう一頭の馬を従え
て入

ってくる。

数馬、挟み箱を結わえた背負子を
担って出てくる。

おゆき「これを」

と竹筒の水筒を二つ。

数馬「すまぬ。

心配する出ないぞ」

おゆき「はい」

とはいうもののおろおろと。

二頭の馬は駆けだして行く。

○城下の町筋（朝）

二人が走るにつれて、通行人が左
右に

逃れる。

○川を越えた街道

明の四ツを過ぎたころ

正親「小国殿、少し馬を休ませよう」

と馬を止めて降りる。

そして手綱を引いて歩き始める。

さらに半刻過ぎたころ、再び馬上

に

なつて駆けだす。

○街道が山に差し掛かったところ

正親、手綱を引いて馬を降りる。

正親「九ツであろう。

中食ちゆうじきにしよう」

数馬「心得ました」

そうして二人は松の枝に手綱を縛
る。

正親、風呂敷を解いて、竹皮の包みを

二つ取り出し、一つを数馬に。

正親「昼飯じゃ」

数馬「かたじけない。

では、これも」

と竹筒の水筒を一本正親に渡す。

二人は座り込んで竹皮の握り飯を

食べ

始める。

正親「貴殿は、貧乏人から治療費を取らぬと

聞いたが、誠か」

数馬「はい」

正親「それでは食べて行けぬであろう」

数馬「世の中は良くしたもので、分限者様

は大枚の銭を落として下さる。

それ故食うに困ったことはありませんぬ」

正親「そんなもんかのう」

数馬「そんなものです」

と笑う。

正親も声に出して笑う。

食事が終わり馬も道の草を食んで

いる。

正親「さあ、参ろうか」

再び二人は馬上の人に。

○山道

正親「この坂は、馬にはきつい。

歩こうか」

と馬から降りて歩き出し同じく数

馬も。

○山の下り道

正親「さあ、もう少しだ」

二人は馬に乗って走り出す。

○黒岩村入口

向こうに海が見える。

近くで鋏を揮^{ふる}っていた百姓に声を

掛け

庄屋の家を聞く正親。

○黒岩村庄屋の家の庭

二人の馬が乗り入れる。

馬から降りて玄関に向かう二人。

正親「頼もう。

庄屋殿は居られるか」

奥から庄屋利助（58）現れる。

利助「はい、お城からおいでで」

正親「そうじゃ。

余は三崎右衛門丞うえもん正親のじょうまぎちかと申す。

こちらは医者の小国殿。

どうじゃ、コレラの具合は」

利助「先頃のお城からの回状で、コレラが
出

たら、直ちに隔離せよとのお達しどお
りに致しております」

正親「それらの者はどこにおる」

利助「浜のとまや苦屋に」

数馬「見に参りましょう」

○海岸の松林に苫屋の列

○同・近くの二軒の苫屋の前

数馬「しばらくお待ちください」

と、背負子しよいこを下ろし、手ぬぐいを二本取り出し、一本で頭を覆い、一本で口を覆う。

数馬「二棟のどちらに患者が居りますか」

利助「それぞれに二人ずつ」

数馬「左様か。

三崎様、ここよりは、こちらに入ってはな

りませぬぞ」

正親「あい分かった」

数馬「今日はもう暗くなり始めておりますから、庄屋殿の家に泊まり、明日には城下へお帰り下され」

正親「いや、様子を見届けねば帰れぬ」

数馬「ここに長く御留まりになるのは危
のうございます。

ここまで案内頂いただけで充分です。

拙者も、二、三日内には帰ります故、報
告

はその折に」

正親「わかった、そうしよう」

二人は夕暮れの道を帰ってゆく。

数馬、一軒の苦屋の筵むしろを跳ね上げ

中へ。

○ 苦屋の中（夜）

中は行燈の灯りが灯され、二人の

大人が筵の上に横たわっている。

その傍に女が一人付き添っている。

女は数馬に頭を下げる。

数馬「お女中、名前はなんと申される」

とめ（48）「とめと申します」

数馬「この二人は？」

とめ「私の父と連れ合いでござります」

数馬「病に臥せって何日目じゃ」

とめ「七日目にございます」

数馬「紅毛人に触ったのか」

とめ「はい、小舟から助け下ろしました」

○ 苦屋の前（夜）

苦屋から出てくる数馬。

次の苦屋へ向かう数馬。

月は煌々と砂浜を照らし、波の音が。

○ 庄屋の玄関（朝）

数馬、やってきて呼ばわる。

数馬「庄屋殿、お早うござる」

すぐに利助、戸を開けて出てくる。

利助「おはようございます。

お体はなんともございませなんだか？」

数馬「左様、なんともない」

そこへ既に出立の準備のできた正親が

現れる。

正親「朝早くにご苦労である。

なにか至急の用があるかの」

数馬「はい。

お二人とも、話を聞いてください

わたくしは、少し離れたここから」

正親「あい判った」

数馬「まず、庄屋殿、コレラ患者の隔離は見事でござった。

うかうかしておると、村全体が病に侵され

るところだった」

利助「はい、お城からの回状で、お指図がありましたゆえ」

正親「隣の藩でやはりコレラが蔓延いたして

すぐさま御家老が隣の藩まで使者を遣わし、

実情をお調べになったから」

利助「はい、それで、もともと十軒あった
苦

屋の数を急遽増きゆうきよやして、患者をそこへ
運び込みました」

数馬「それでじゃ。

コレラは吐き気と下痢が主なる症状だ
が、

これを直す薬は、オランダ人も持って
おらなんだ。

これを捨ておくと、食欲はどんどん落
ちて、

その上、体から養分と水分が抜け落ち
てゆき、挙句の果てはやせ細って死ん
でゆく。

そこで、食欲が無くても、無理にでも食
べさせてもらいたい。

例え食べたものの九割が体から出ても、
一割でも残っておれば、それが二割、三
割と

増えて行けば、病は治る。

実際、半分ほどの患者は治ったそうだ。

食事は、薄い粟粥あわがゆか麦粥むぎがゆに塩味を効かせて、

さらに梅干しの実をすり潰して入れる。

さらに食欲が進めば、焼いた魚の身をほぐし入れてくれ。

生ものはいかん。

必ず火を通すことじゃ。

さて、次は苦屋の工夫じゃ。

吐いたもの、下痢したものは、苦屋にす

でにある桶に取って、表の肥桶こえおけに移す。

肥桶は半分ほど溜まったら沖の海に捨てる。

よごれた筵むしろは、手を触れずに鍬くわなどで掻きだして、外で燃やす。

如何かの」

正親「うん、なるほど」

利助「ほうほう、確かに。」

ではすぐにでも」

数馬、懐から大きな紙包みを取り出し、

数馬「これは、下痢吐き気止めの漢方薬じや。

薬種問屋からかき集めて来た。

コレラに効くか効かぬかわからぬが、この薬包紙やくほうし一つを、小さい湯飲みの湯ざましに溶かして与えなされ。朝昼の食間に一回ずつ。

この壺の砂糖を混ぜれば飲みやすい。それから、薬は症状の軽い者から飲ませなされ」

利助「それは逆ではござりませぬか」

数馬「コレラは一度かか罹ると二度は罹らぬそうだ。

その回復したものが患者の世話をする」

利助「おお、なるほど。

ところでお薬のお代は如何ほど」

数馬「効くか効かぬか分らぬ故、銭はい

らぬ」

正親「なるほど、済まぬの。

いまから出立じゃが、すぐ御家老にお
伝えして置く」

数馬「はい、私ももう一日、事態を見届け
てから帰ります。

とは言うものの、わたくしの出来るこ
とは

ほとんどなにも在りませんが」

正親「いやいや、ご謙遜を。

では、出かける。

さらば」

数馬「はい、道中お気をつけて」

T 二日後

○砂浜の苫屋の列（朝）

馬を従えた数馬。

汚れた白衣に白頭巾の男たちが、
苫屋から死者を運び出している。

数馬「あの者たちは誰かの」

利助「はい、隠亡おんぼうでございます。

焼き場で亡骸なきがらを燃やす男たちでござい
ます」

数馬「ああ、あれが。

酷な仕事じゃのう」

利助「さて、三日の間、色々お指図ありが
と

うございました。

今お出になれば、夕刻には城下に御着
きな

されましょう。

どうぞご無事で」

数馬「そなたもコレラに罹らぬようにな」

利助「ありがとうございます」

数馬「では、さらばじゃ」

数馬、乗馬して進み始める。

○街道横の河原

数馬、馬を水辺に繋いで草を食ま

せ、自身は裸になって水浴び。

数馬「ああ、いい気持ちじゃ。

あの者たちにも水浴びさせてやりたい
もの

じゃが・・・」

○城下の数馬の家の庭（夕方）

雨脚が繁くなる。

数馬、馬から降りて、軒先の雨にか
からぬ場所に馬を繋ぐ。

○同・家の中（夕方）

薄暗い家の中に入ってくる数馬。

閉じた畳の間に行燈の灯が。

数馬「おい、誰か」

数馬、背負子を下ろす。

奥の障子戸が開いて、おうめと弥

人が

飛び出てくる。

おうめ（５）「先生！」

弥八（9）「先生！」

数馬「どうした。

みんなはどこじゃ」

弥八「秀（7）がおらんようになった！」

数馬「なに！」

ちようどその時おゆきが入ってくる。

傘は持っているが濡れそぼれて。

おゆき「ああ、数馬様！」

数馬「おい、どうした

秀がどうした」

続いておひさ（15）も帰ってくる。

おゆき「どう？

居なかった？」

おおきく頷くおひさ。

おゆき「ああ、どうしましよう」

数馬「何がどうなったのか、ちゃんと訳を

話さない」

おゆき「はい、あの・・・。

きのうから秀がいなくなつたのです。

弥八の話によると、旅回りの芝居のお練り

について行ったらしいのです」

数馬「芝居！」

弥八「おら、行くなといったのに……」

数馬「芝居小屋はどこにかかっている？」

おゆき「お城の反対側の八島神社の境内だと

か」

数馬「今何時どきだ。」

七つ（現在の4時）ぐらいか。

よし、わしが行ってくる」

と、外へ。

○同・家の外（夕方）

数馬、馬に飛び乗って駆けだす。

○街道筋（夕方）

速足で馬を駆る数馬。

しばらく行くくと人影が。

近づいてみると浅だった。

濡れそぼり、顔をくしゃくしゃに

して。

数馬「おお、浅！」

浅（18）「先生！」

数馬「どうだ、秀は見つかったか？」

浅「先生！」

数馬「泣いてばかりでは判らん。」

どうしたのじゃ」

浅「秀は自身番所（町民の交番）に」

数馬「自身番所とな。」

よし判った。

この馬に乗れ」

と、自分の後ろに浅をひきあげる。

数馬「しっかり掴つかまっているんだぞ」

馬は駆けだす。

○東の自身番所（夕方）

浅を下ろしてから馬を降りる数馬。

馬を前の木に繋ぐ。

自身番所の障子に手を掛ける。

○自身番所の土間（夕方）

上がり框に腰かけている与力の三崎。

隣には目明しの作次（51）。

数馬「おお、三崎様」

正親「小国殿、参られたか。

長旅でお疲れとも思うが、早速だがご検分願おう。

こちらへ」

と土間に拵げられた筵のところへ。

正親「この子だがな。

先程、その子が、弟の秀と申したが、相違ないか」

と筵をめくる。

そこには無残に切り殺された秀の遺体。

目を背ける浅。

正面右肩から左腹にかけて一刀の
もと

に切り裂かれ、さらに、心の蔵や肺
に至る刺し傷も。

一瞬息を止める数馬。
それから大声で泣き始める。

数馬「秀！ 秀！」

肩を震わせ嗚咽する数馬。
血の付くのもかまわず秀を抱き上
げる。

周りの三人はただ見守るだけ。

暫くの後、秀を横たえる数馬。

数馬「いったい誰がこのようなことを」

正親「どうも、野武士の仕業らしい。

子供が殺やられたのは初めてだ」

作次「ゆんべ夜回りが知らせて来たんで
さ。

隣の街道に子供の骸むくろがと」

数馬、骸の様子を、涙を拭きながら
検分する。

数馬「これは、二人がかりだ。

最初の一太刀で切り下げたのは、手練^てだ。

後の太刀は、素人だ。

指した剣が、肉が絡みついて抜きにくくなったのを、無理やり抜いた様子がある。

このような手口の犯人に、心当たりは？」

正親「さあ、この一年で辻斬り、強盗が五件発生しておく。

商家に押し入った野武士は、相手が抵抗したときのみ殺している。

外へ出たとき、急いでいてこのような殺しをしたのやも知れぬ」

数馬「うーむ、この仇討^{かたき}たずにおくものか」
正親「小国殿、逸^{はや}るでないぞ。

そなたにはたくさんの子供が居る。

万一のことがあれば、彼らが路頭に迷う」

数馬「・・・はい、承知。

では骸むくろを引き取り申す」

と、秀の体を包んでいた上下の筵を、

傍の縄で上下縛り、抱え上げ、自身番から出る。

○自身番の外（夕方）

正親も外へ出てくる。

数馬「三崎様、お借りいたしておりました馬をもう一日お借り申す」

正親「かまわん、使え」

数馬「かたじけない」
と、筵を馬の背に。

数馬「浅、馬に乗れ」

浅の足に手を添えて鞍に乗せる。

数馬「三崎様、黒岩村の報告は後日」

正親「うむ。

気を付けて帰れよ」

数馬「はい」

数馬、手綱を取って歩き出す。

○数馬の家に向かう街道の角（夕方）

数馬「浅、お前はここで降りて家へ帰れ」

浅「先生は？」

数馬「秀の無残な軀むくろを、みなに見せたくない。

このまま焼き場に向かう。

おゆき殿に夜遅くなると伝えてくれ」

○山裾の焼き場（夕方）

焼き窯の前には、石の長椅子に、数名

の、遺体の焼き上がりを待つ人たち。

小屋から隠亡が二人出てきて

隠亡（59）「お待たせいたしました。

これが御遺骨でござります」

と待っている人の内、年かきの男に。

骨壺を渡す。

男（63）「お世話になりました」

と頭を下げ一同一列になって出てゆく。

隠亡「あの、御用かな」

数馬「このような遅くにお手数だが、この

骸むくろを焼いてもらいたい」

隠亡「ほお、なにか仔細がありそうなの」

数馬「野武士に切り殺された息子でござる。

あまりに無残な亡骸なきがらゆえ、家の者には見せとうなくて、お願いに参りました」

隠亡「そういうことなら早速に」

数馬、馬を引いて、隠亡の指示する台の上に筵を置く。

隠亡「焼き上がりが暮れ六つ程になりますが、

よろしいかな」

数馬「はい」

○数馬の家の表（夜）

入口の前で呼ばれる。

数馬「今帰ったぞ」

ばたばた音がしたかと思うと、おゆきが出て来て戸を開ける。

馬から降りる数馬。

数馬「秀の骨じゃ」

と、お雪に骨壺を渡す。

どつと涙の湧き出るお雪。

馬を軒下に繋ぎ、家から藁の束を持って出て来て、馬の前に置く。

さらに井戸から水の入った桶を持って来て、馬の前に置く。

数馬「お前もご苦労だったな」

と馬の胴を撫でてやる。

○同・家の中（夜）

子供たち、大声で泣きながら寄つてくる。

る。

おゆき「数馬様、お召し物を替えられませ。
血がついております」

と言いながら、箆笥から浴衣を取
り出

し、数馬に渡す。

おゆき「盥たらいに湯を張っております」
数馬「すまん、では。」

あ、浅おまえも来い。
濡れたままであろう」

おゆき、浴衣を浅にも渡す。

○同・板の間（夜）

飯の
床に折敷おしきが並べられ、その上に麦

入った茶碗、みそ汁の茶碗、それと
香の物に箸。

おゆき「さあ、頂きましょう。」

泣いてばかりでは、身が持ちませぬ」

数馬「みんな夕餉はまだだったのか」

おゆき「秀のことが気がかりで」

数馬「うむ、そうか、それでは頂こう」

みな黙々と食事。

時々秀の骨壺を見ては涙を流す。

食事がすんで、それぞれの折敷を

手に、土間に降りて流しに。

片端からおゆきとおひさが、洗っ

てゆ

く。

数馬「今夜はみな畳の間で寝なさい。

わしは、ここで通夜をする」

浅「おいらも」

数馬「いや、あしたも忙しい。

手伝ってもらおうこともあるから、向こ

うで

な」

浅、うなずいて、他の年少者を連れ

て

隣の畳の間へ入り、障子を閉める。

おゆき、湯飲みに焼酎の湯割りを

持っ

て来て数馬の前に置く。

おゆき「このままでは、神経が持ちませぬ。

今宵は過ごされませ」

数馬「すまぬ。

そなたも寝てくれ」

おゆき「いえ、私も一緒に通夜を」

数馬「うん、そうか」

二人は押し黙って座ったまま、行燈の灯りに照らされた骨壺をながめている。

もう涙も枯れ果てて。

○同・板の間（朝）

目を覚ます数馬。

みると、壁に寄りかかった数馬の

体

に、お雪が寄りかかって寝ている。

どきつとする数馬。

数馬 M 「おお、これは！」

ゆっくりお雪の体を床に横たえる。

それでおゆきも目を覚ます。

おゆき「ええ？ あら。

私としたことが。

数馬様、大変失礼しました。

知らぬ間に寝ていたのですね」

数馬「よい、よい。

そのまま寝て居れ」

そのとき障子が開かれ、子供たちが入ってくる。

おうめ「先生、お早う」

おゆき「あらあら、もう寝てもらえぬ。ぬ。

朝餉の用意を」

○同・玄関（朝）

数馬出て来て、（忌中）と書かれた半紙を玄関に張り付ける。

○同・朝食の膳（朝）

それぞれの折敷に、素麺と醤油の

つけ汁とネギ。

数馬、秀の骨壺を以前の家主の仏壇に置き、手を合わせる。

みなそれに従う。

数馬、自分の席に着き

数馬「いただきます」

全員手を合わせ唱和。

食べ始める。

食べ終わって、お雪が湯飲みに茶を入れて回す。

数馬「坊様を呼んでお経を読んでもらおう

と思うが・・・」

浅「どこの寺？」

数馬「そりゃあ、この近くには法莫寺しかないが」

浅「あそこは嫌だ。

雨の降る日に、本堂の床下で雨宿りしてると追い出された」

数馬「なんと、それは誠か。

坊主らしからぬ振る舞いだの。

よし、読経はやめだ。

秀は、この世でよい事しかしておらぬから、

必ず極楽にいったであろう。

我々が毎日手を合わすだけで供養になる。

そうしよう」

おゆき「あなた様は随分思い切ったことを

なさるのですね」

数馬「なんだ、反対か」

おゆき「いえ」

数馬「そうか。

それから今日から浅をわしの後継ぎとする。

よいか、浅」

浅「（びつくりした顔で）へえっ？」

数馬「名前も医者にふさわしく、小国浅太郎とする。

わしは一応武士だから苗字も譲る」

浅「おつたまげた！

小国浅太郎！」

数馬「そうだ。

だからあと、小国弥太郎、小国さわ、小国うめということになる」

浅太郎「そうすると、先生は・・・」

数馬「お前たちの父親だ」

うめ「これは大変だ。

どうすべえ」

数馬「慌てることは無い。

ゆつくり慣らしていくのじゃ」

おさわ「じゃあ、うちの母様かかは？」

数馬「母様？

ああ、そこまで考えが及ばなんだ。

えーつと」

おうめ「おゆき様が母様になるがいい」

おさわ「うちもそう思う」

弥太郎「そうだ、そうだ」

数馬「ええつと、おい、まてまて。」

そんな、急に言われても」

おたけ「先生は、おゆき様が嫌いだか？」

数馬「いや、あの、なんだ、その」

浅太郎「お侍でしょう、はっきりしなされ」

数馬「いや、まったく。」

参ったな、おゆき殿」

おゆき。下を向いて顔を赤らめる。

そのとき、表から

万作（37）「先生、今日は忌引きでお休

みか

ね？」

数馬「え？」

○同・表（朝）

数馬「ああ、どこが悪い？」

万作「仲間が膝を折って大ごとなんだけど、

見てもらえるかね」

数馬「はいはい、今すぐ。」

おい、みんな、膳をかたづけ」

おゆきと子供たち、急いで膳をか
たづ

ける。

数馬「助かった！」

おゆき「助かった？」

誠にそのようなお気持ちですか？」

数馬「いや、そうではない。

その話は後程」

おゆき、にっこり笑う。

表には、荷車にのった青年。

苦痛に顔をしかめている。

○同・家の庭（夕方）

数馬とおゆきが立っている。

数馬「忌引きだというに、患者が多かった
の」

おゆき「ええ」

数馬「だが、患者が楽になるに如くはない。

そうであろう？」

おゆき「そうでした」

数馬「実はそなたに相談がある。

子供たちには聞かせられぬことだ」

おゆき「何でございましょう」

数馬「わしは秀の仇を討ちたいと思う。

仇を討つのに何年もかかるやもしれぬ。

そのことを胸に秘めておいてくれ」

おゆき「そんな危ないことを」

数馬「わしは悔しくてならんのだ。

あんな幼い子供が殺されることが。

いろいろそなたに負担がかかるやも知

れぬ。

望みならば、里へ帰ってもいい」

おゆき「いやでございます。

帰りません。

ここが居心地が良いのです」

数馬「そうか。

朝方の、子供たちがそなたを母に欲し

いと

言ったことだが、実はわしも・・・」

おゆき「なんででしょう」

数馬「んんん・・・。

言葉が出てこない。

実は故郷にいたころ、ある女子おなごに懸想けそうして

恋文まで届けたことがあるが、きつぱり断られた。

それ以後わしは色恋に憶病になった。

そなたを憎からず思う気持ちはあるが、怖くて伝えられなんだ。

今こそ言おう。

わしはそなたが好きだ」

おゆき「知っておりました。

最初お逢いしたときから。

それは私も同じこと。

今日言おう、明日言おうと思いな
二年

経ってしまいました」

数馬「ふうむ。

以前ならば、そなたの気持ちが分かつた以上、お父上に話してすぐさま夫婦めおと

になる所だが、さつきも言った通り、仇討が・・。

仇かたきが見つかり、剣で挑んでみても向こうが強ければ、そなたはまた夫を失つてしまう。

だから、それがかたずかぬうちは、夫婦めおとにはなれぬ。
許してくれ」

静かに頷くおゆき。

数馬「昼は普段通り診療を続け、夜には、城下を仇を探して歩く。

だから子供たちには、夜間の往診だと言ってくれ。

今宵、夕餉の後、自身番に馬を帰しがてら、野武士のことを聞いて来る。

子供たちを頼む」

おゆき「はい」

○武家屋敷の番所（Ⅱ武家の交番 夜）

馬から降りた数馬、番所の戸を開

く。

数馬「頼もう」

正親「あ、小国殿」

数馬「馬を有難うござった。

助かり申した」

正親「いや、なんの。

葬儀は終わったか」

数馬「はい。つきましてはコレラの報告を

これなる書面に認めしたたました。

どうぞ御家老にお渡しください」

正親「忙しいのにすまんのう。

確かに預かった。

どうじゃ、辛かろう、子供を亡くして」

数馬「はい。

しかしこれも天命、致し方ありません。

それではこれでお暇いとま致します」

正親「また落ちついたら一献酌み交わそ

うぞ」

数馬「はい、では」

一礼して小屋を出る数馬。

○自身番内部（夜）

引き戸を開けて、数馬が入ってくる。

岡っ引きの作次が煙草をくゆらせている。

数馬「御免」

作次「ああ、旦那。

昨日はとんだことで、

お心落としと存じやす。

今日はなにか？」

数馬「いや、他でもない。

昨晚も話した野武士の件だが。いつ何

時に

奴らが現れたか、教えてもらいたい」

作次「お聞きなすつて、どうされようつて

んで」

数馬「夜回りを始めようと思う。

わしの子供の様なことが起らぬように」

作次「有難いこつたが、それは危ねえ」

数馬、腰の一刀を掴み、

数馬「わしは柳流免許皆伝。

なにも恐れることは無い」

作次「へえっ、それは頼もしい。

こちらとしては、願ってもねえこと。

それじゃ、ちよつと待って下せえよ」

と、畳敷きの部屋に上がって、押し

入

れの、たくさんな書類の中から一

束を。

それを持って来て、何枚かめくり、

作次「ああ、これだ。

野武士の被害は三年前めえから始まっている

やす。

これでいくと、おおよそ一年に四件」

数馬「襲われたのは商家か」

作次「ええ、それがね。

現れたのは間違えねえんですが、どこ

の店も襲わずに、辻斬りだけやって逃

げてることもある。

こりゃあおかしいんですがね」

数馬「やられるのは、町家だけか」

作次「そりゃあ、銭があるのは町家だけで
すから、当たりめえ」

数馬「一体何人組なのだ」

作次「へえ、黒装束の二人組でやんす」

数馬「二人組か」

作次「へえ、襲われた店の主人が言ってる
んで間違いござえやせん」

数馬「どこの店が襲われたかは記録にあ
るな」

作次「ええ、此の通り」

と書面を指し示す。

それに目を通して、

数馬「二度襲われた店はあるのか」

作次「そりゃあ、ありましねえ」

数馬「まだやられていない大店おおだなはわかる
か」

作次「あと二軒だけでさあ。

しもの
下野屋と筑後屋」

数馬「筑後屋はわかる。

下野屋はどこだ」

作次、奥に引っ込んで一枚の紙を
持つ

てくる。

作次「これでさあ」

見るとそれは木版の二色刷り。

城と武家屋敷と町屋が細かく書か
れて

ある。

数馬「町ごとに木戸番があるが・・・」

作次「どうも木戸番のいねえ裏木戸だけ
を

通っているようで」

数馬「下野屋しものはどこだ」

作次「ええつと・・・ここ」

数馬「この地図もらい受けてよいか」

作次「どうぞ」

数馬「襲われる時刻は」

作次、帳面をめくりながら、

作次「こおつと・・・、そうですねえ」

だまって返事を待つ数馬。

作次「おかしな話ですがね。」

寒いときは戌の刻五つ頃、暑いときは亥の

刻四つ頃が多うござんす。

野武士も人の子、暑い寒いは堪こたえるんでしようねえ」

数馬「左様か。」

それでは明晩から張り込もう」

作次「どこから始めやんすか」

数馬「そうだな、筑後屋にしよう」

作次「それなら明日にでも筑後屋に話を通しときますんで」

数馬「いや、それは止めてもらいたい。

わしが野武士なら、下働きのものを筑後屋に潜り込ませて、様子を窺う。

だからその者たちに気取られてはなんにもならん」

作次「ですがね。」

下世話の話で恐れ入りやすが、わしら
岡つ

引きには給金といったものはごさいや
せん。

その折々関わったものから金品を受け
取って世過ぎしておりやす。

ですから、この際、筑後屋に話をつけね
えと、こちとらが困るんで」

数馬「ほう、そうか。

それは難儀だのう。

よし、それならば」

と懐から錢袋を取り出し、一両小
判を

一枚作次に渡す。

数馬「これでどうだな。

また折に触れて渡そうものを」

作次「いやあどうも。

わかりやした。

筑後屋には黙って」

数馬「たのむ。

早速だが、今から筑後屋に行こうと思
う」

作次「へえ、では」

と帳面をかたづけ、土間に降りる。
数馬と作次、表へ。

○町屋の街道（夜）

月の無い夜の道。
二人の足音がひたひたと。

○筑後屋・外観（夜）

やってくる二人。

間口八間のおおだな大店。

明かりはすべて消えている。

数馬、声を潜めて、

数馬「待ち伏せするには・・・」

あたりを見回す。

作次「この向かいのここが」

と指し示すのは、間口一間半の

仕舞屋しもたや。

数馬「ここは人が居らぬのか」

作次「へえ、もとは団子屋で」

数馬「そうか、ではここで張り込むことにする。

どう言うふうに借りるのじゃ」

作次「いえ、それはあつしが明日にでも」

数馬「そうか、すまぬ。

入用は言ってくれ」

作次「へえ」

数馬「それでは今宵はこれで」

作次「お気をつけて」

二人は離れ離れに。

○数馬の家・玄関（夜）

数馬、引き戸を、音のせぬように、

ゆっくり開き中へ。

○同・土間（夜）

板の間で寝ずに待っていたおゆき。

数馬、声を潜めて、

数馬「すまん、寝ていれば良いものを」

おゆき「もう、お謝りなさるのは止めてく

だ

さいませ。

好きで起きていますから」

数馬「うむ」

おゆき「如何でございました？」

数馬「野武士のおおよその動きが読めた。

明日から、夜、張り込みをする」

おゆき、数馬の手を取って、

おゆき「心配でなりません」

数馬「それを言うな。

気持ち揺れるから」

おゆき「はい。

あ、あの、行水の湯が残っています。

お浴びなさいませ」

数馬「それは有難い」

数馬、土間の奥の行水部屋の戸を

開く。

○行水部屋（夜）

数馬、盥たらいに半分ほど残っている湯を被

り、下半身を洗い、中に浸かり、湯を手で救い上げては、体をこする。戸が開いて、お雪が浴衣を差し入れる。

数馬「すまん」

おゆき「また謝られる」

数馬「おお、そうか、すまん。

あ、またいうてしもうた」

声を潜めて笑う二人。

○同・板の間（夜）

二枚の褥しとねが並んで敷かれている。入ってくる数馬とおゆき。

数馬、一枚の褥しとねを引っ張って部屋

の隅

へ。

おゆき「なぜですか」

数馬「何故と言って、その・・・。

袴しとねがそばにあると、わしも男だから、つ

い

むらむらとして、そなたに手を伸ばす

やも

知れぬ。

その因果でそなたが子を身ごもってしまえば、祝言も挙げぬに子を産んだと、そなたが後ろ指刺されるやも知れぬ。

ましてそなたの父御ててこに恥をかかすこと

に

なる。

それは何としても避けたい。

許せ」

おゆき「また謝った」

数馬「あ、そうか。

これは習い性しょうゆえ直らぬわ」

おゆき「許して差し上げます。

もう寝ましょう」

数馬「うん」

○同・板の間（朝）

水の音で目を覚ます数馬。

行水の残り湯で洗濯しているおゆき。

竈の鍋に豆腐を入れているおひさ。

入口から浅太郎が手桶を手に入っ

て来

て、水瓶にその水を移す。

数馬「おはよう、浅太郎」

浅太郎「おはようございます。

昨夜の往診は、遅くまで大変でしたね」

数馬「うん、今宵からもずっと往診が続く。

ご家来の老人が病に臥せておつてな」

浅太郎「私でよければ代診致しますが」

数馬「いや、随分がんなお年寄りでな。

そちの手に余る」

浅太郎「そうですか。

手の足りないときはいつでも」

数馬「おお、そうしよう」

○同・庭先（朝）

弥太郎が薪割をしている。

畑では、おうめが、野菜に水を撒いている。

数馬「おう、みんな精が出るのう」

数馬の手には二本の竹刀しない。

数馬「浅太郎、今日からそなたに剣術を教える。

よいか」

浅太郎「（嬉しそうに）はい！」

数馬、裏山近くに連れてゆく。

数馬「本来なら防具をつけるが、そんなものは無い。

だから、突いたつもり、切ったつもりすんの寸止とめでやる」

数馬、竹刀を突き出し、頭の一寸前で留め、やはり竹刀を振りかぶつて、胸の前一寸で止めて見せる。

数馬「わかったか」

浅太郎「わかりました」

数馬「では打ってこい」

段 浅太郎、一步、二歩にじり寄り、上

に振りかぶり、打ち下ろす。

数馬それを払いのけ、胸に目掛け

て竹

刀を繰り出す。

浅太郎、よろけながらも竹刀で受ける。

数馬、竹刀を回転させ手元へ向け

て

数馬「小手！」

おたおたする浅太郎。

それでも竹刀で叩き落とし、同じ

く

小手を狙う。

浅太郎「小手！」

一步下がる数馬。

数馬「次は胴じや」

一歩近づき横に払う。

防

浅太郎、一歩退き、竹刀を縦にして

ぐ。

と

数馬。もう一歩近づき、鏝迫り合

なる。

浅太郎、若輩ながら力が強い。

しばらくもみ合ううちに、両者同

時に

引き下がる。

数馬「次は脚じゃ！」

数馬、片足の膝を地に付け、そのま

ま、

竹刀を両手で上にかざす。

浅太郎「ヤア！」

とその水平の竹刀に打ち込む。

次の瞬間、それを跳ね上げた数馬

の竹刀が、浅太郎の前足を襲う。

尻餅をつく浅太郎。

数馬、立ち上がり、大息をつく。

数馬「初めてにしては良いぞ」

浅太郎「誠ですか？」

数馬「おお、嘘は言わぬ。

もう少しやろう」

こうして四半刻とき稽古は続く。

おひさ「朝餉ですよ」

数馬「おお、そうか。

今日はこれまで」

○筑後屋の前の仕舞屋・外観（夜）

○仕舞屋の内部（夜）

明かりも無い店の中。

街道に面した格子の間から、椅子に座って外を窺う数馬。

秋の夜風に乗って、枯葉が一枚、隙間から入り込む。

数馬、大欠伸。

○同（夜）

数馬、抜いた大刀を縦にして、波紋を眺めている。

わずかに開けた障子の間から、時々、

筑後屋を窺う。

雪花が通りを駆け抜ける。

○同（夜）

こっそり入ってきた作次が、包みの中から焼き芋を取り出し、数馬に勧める。

数馬「おお、これは有難い。

馳走になろう」

一本取り上げて、二つに割り、口に入れる。

数馬「おお、これは甘い」

作次も芋を食う。

作次「あれでやんすね。

あの、旦那の話聞いて、はて、いつま

で

続くやらと思っておりやんしたが、なんと

二年目に入りやした。

こりやあ参った」

数馬「仇を求めて諸国を^{へめぐ}経巡るほどの苦
労は

ない。

こうして座って待っているだけ」

作次「辻斬りはあれから三件。

場所もこれといって当たりが無え。

こりやあ、見つけようがありやせん、

お奉行様も手を焼いていなさる」

数馬「時間は掛かっても張り込みに勝る

は無

い」

ふたりしてため息をつく。

T
そして・・・

○筑後屋前の仕舞屋の中（夜）

亥の刻四つ。

転寝うたたねをしていた数馬。

ふと物音に目を覚ます。

外を覗くと、筑後屋の大戸が大きく開かれています。

数馬「しまった！」

すぐに懐から紐を取り出し、たすき掛け、刀を腰に表へ。

○筑後屋の表（夜）

中から（ギヤァ）という叫び声。

店に飛び込もうとしたその時、二人の

黒装束に宗十郎頭巾の男二人が、抜き身を下げて飛び出て来るのと、危うく鉢合わせ。

数馬「うぬら、野武士か！」

野武士1「なんと！」

数馬「おい、ここで勝負だ」

野武士2 「何を言うとする。

この男、頭がおかしいのでは」

数馬 「まともじゃ。

うぬら、去る一年前、ここより一町ばかり

戻ったところで、子供を殺したである

う」

野武士1 「はあ？

いよいよもっておかしいぞ、こいつ。

我等落ちぶれ果てたりと言えども武士
じゃ。

子供を殺すなど考えも及ばんわ。

邪魔立てすると切って捨てるぞ」

数馬 「切れるものなら切って見ろ。

わしはその子の父親だ」

数馬、刀を抜き、身構える。

野武士2 「面倒だ。

倒してしまえ」

前の男が、ツイッ、ツイッと刀を繰り出す。

数馬刀でそれを避けながら通りの真ん中迄下がる。

さらに突いて来るところを、左膝を地面に着き、低い姿勢から男の前足を切り裂く。

野武士1、どうつと倒れる。

立ち上がろうともがく。

すぐさま、数馬、野武士2と相対する。

野武士2「こやつ、妙な剣を！」

今度は剣を上段に振りかぶり、切り下ろして来る。

二度、三度。

数馬、その都度剣で横に払う。

隙ありと見た男、胸元目掛けて突いて来る。

数馬、その剣を己が剣にクルリと絡めて跳ね飛ばす。

姿勢を崩した男の剣は片手持ちになる。

ここぞとばかりに差し伸べた数馬の切っ先が男の心の蔵に突き刺さり

野武士 2 「ゲエッ」

男は血を吐きながら倒れる。

数馬、野武士 1 を見据える。

とてもものに立ち上がれない男。

数馬 「止めじや」

数馬の剣が男の喉元を襲う。

ドクドクと流れる血。

暫く茫然と立ち尽くす数馬。

やがて気を取り直して、懐から懐

紙を取り出して、血染めの刀を拭

う。

そこへ一人の男が寄ってくる。

筑後屋与兵衛（58）「ああ、お武家様、

誠に

有難うございました。

私どもの手代が殺されましたが、おか

げで

仇を討てました」

と、数馬の顔を覗き込む。

与兵衛「あつ、小国様、小国様ではござい

ま

せんか」

数馬「おお、筑後屋さん、御身に怪我は無

い

か？」

与兵衛「はい、なんとか生きております」

数馬「そうか、それは良かった」

傍では番頭が二人の懐から血染め

の

小判の入った袋を取り出している。

番頭（49）「旦那様、これこの通り」

与兵衛「今から人をやって自身番に届を
して

おくれ。

ああ、小国様、どうぞこちらでお召し替

え

を。

血だらけでございます」

数馬「おお？　そうか、血だらけか」

与兵衛「どこもお怪我はござりませぬか？」

数馬「うん、大丈夫だ」

与兵衛「では、こちらへ」

と、店の中に案内する。

○筑後屋内の店先（夜）

すでに三本の行燈に灯が入れられてい

る。

与兵衛「どうぞお上がりください」

数馬「いや、ここで良い。

自身番の検分が終われば早く帰りたい。

家の者が案じておるでな」

与兵衛「それではしばらくお待ちを」

と奥へ引っ込む。

数馬、上がり框に腰を下ろし、大息をつく。

やがて与兵衛、一枚の着物を持つてくる。

与兵衛「お気に召しますかどうか」

数馬「いや、そのようなことを考える暇いとまもな

い。

なにしろ、生まれて初めて人を殺したのだから。

では拝借する」

土間で着物を脱ぎ、新しい着物を着る。

数馬「恐れ入るが、水を一杯所望したい」
与兵衛「はい、ただいま。」

おい、おちよ、水を差し上げて」

うなづく女中。

数馬、目を閉じて考えに耽ふける。

そのとき、先程の野武士の言ったことが浮かんでくる。

野武士 1 の声 「我ら落ちぶれ果てたりと

言え

ども武士じゃ。

子供を殺すなど考えも及ばんわ」

ハッと思ひ当たり、土間に横たえ

られた手代の軀むくろに近づく。

そしてまじまじと眺める。

数馬「そうか！」

数馬表へ飛び出す。

○筑後屋の軒先（夜）

やはり横たえられた野武士二人の傍へ。

それぞれの軀の上に置かれた刀を一本ずつ取り上げて、店の灯りに透かして見る。

数馬「やはりそうだったか」

刀二本を持って、店の中へ。

もう一度、刀を検分。

おちよ「小国様、どうぞ」

と湯飲みの水を差し出す。

数馬「おお、かたじけない」

湯飲みを受け取り、一息に飲む数馬。

そうして目を閉じ、腕を組んで物思いに耽る。

暫くして、店に正親率いる捕り手役人の一団が駆け込んで来る。

正親「おっ、やはり誠であつたか。

張り込んでおるとは聞いていたが、こ
こま

でやるとは、貴殿は豪傑じゃのう」

数馬「いえいえ、とてものこと」

正親「怪我は無いか」

数馬「はい。

ところで、一つ明らかになったことが
ござります」

正親「ん？ なんじゃ」

数馬「表の二人の野武士は、私の子を殺め
た下手人ではございませぬ」

正親「なんと！

なぜそう言い切れる」

数馬「この二本の刀でございます」

正親「刀？」

数馬「ご覧ください」

と言つて、二本の内の一本を抜いて見せる。

正親「これがどうかしたか？」

数馬「ご覧のように、結構刃こぼれがござり

ます。

ほら、もう一本も」

と言つてもう一本の刀も抜いて見せる。

正親「それがどうしたか」

数馬「私どもの子供の秀の着物は、まるで剃刀のようにスパッと切られておりました。

この刀ではそうは参りませぬ。

それが証拠にその亡骸。

着物がほつれながら切られております。

ですから、表の二人は、少なくとも私の
仇ではございませぬ」

正親「ふうむ、なるほど。

さすれば・・・」

数馬「一から出直しです」

正親「うーん」

○数馬の家の土間（夜）

戸を置いて入ってくる数馬。

行燈の灯る板の間には、一人ポツ

ネン

と座っていたおゆき。

おゆき「まあ、大事ございませんでしたか。

今、子の刻かと思ひますにお帰りが無

いので案じておりました。

あ、お着物が！」

数馬「おお、これか。

これは筑後屋で借りて来た」

おゆき「なぜ？」

数馬「行水部屋へ行こう。」

声が漏れると子供たちが起きる」

おゆき「はい」

○土間の突き当りの行水部屋（夜）

盥たらいの縁に座っている数馬。

小さな椅子に腰かけているおゆき。

数馬「と、まあ、そう言う訳だ」

おゆき「お怪我は？」

数馬「無い」

おゆき「そこまでなさったのに、下手人では

ないなんて」

数馬「わしも驚いている。

さて、これからどうしたものか・・・」

考え込む二人。

おゆき「もう仇討ちはお止めになられたら」

数馬「わしもそれは考えぬでもない。

されど、あの秀の顔を思い出すたび、怒り

が湧いて来る。

これは止めようもない」

また黙ってしまふ二人。

おゆき「さあ、もう寝ましょう。

考えるのは明日にして」

数馬「うん」

立ち上がる二人。

T
三日後

○数馬の家

家の前の長椅子には、患者が座つて待っている。

○同・板の間

数馬が診察をして、浅太郎が薬を選別して渡している。

突然土間に入ってくる正親。

正親「御免」

数馬「あ、三崎様！」

正親「仕事中済まんが、城に来てくれぬか」

数馬「城へ！」

いったい何事でございますか」

正親「ここでは話せん。

頼む」

数馬「はい、わかりました。

浅太郎、そなたが診察を続ける」

浅太郎「私が！」

数馬「そうだ、そなたにはほとんど医術を

教

えてしもうたゆえ、大丈夫だ。

頼んだぞ。

では三崎様、参りましょう」

二人は出てゆく。

○同・家の前

洗濯物を干しているおゆき。

気づいて飛んでくる。

おゆき「数馬様、何事でございますか」

数馬「今からお城に参る」

正親「お内儀、心配無用」

数馬「すぐ帰ってくる。

心配せずともよい」

とそのまま家を出てゆく。

○城へ続く武家屋敷の道（朝）

数馬「いったい何事でございますか」

正親「実は拙者も知らんのだ。

御家老直々の命でな」

数馬「御家老が？」

首を傾げながら続く数馬。

○城・裏御門（朝）

くぐり戸から入る二人。

門番が戸を閉める。

正面の階段を上ると、小さな庭園。

○庭園中央の東屋あずまや（朝）

正親「ここで暫時お待ちください。

御家老をお呼びしてくる」

と歩み去る正親。

数馬、椅子に座って庭を見渡す。

かれこれ四半時。

正親に先導されて国家老がやって

来る

正親「御家老、この男が小国数馬でござい

ま

す。

小国殿、こちらが国家老堀田様じゃ」

数馬「はっ」

堀田信正（72・国家老）「待たせたな。

本日そなたを呼んだのは、余の儀ではない。

我が藩存亡にかかわる一大事じゃ。

人に聞かれては困る故、見晴らしの良
いここで話すことにした」

数馬「はい」

堀田「野武士を倒したお主に頼みがある」

数馬「はて、何でござりましょう」

堀田「事の起こりから話さねばなるまい。

当藩のお世継ぎ、和興かずおき様のことじゃ。
生来ご闊達な性分で、幼いころから殿
中を

駆け巡っておられた・

その若君に異変が起こったのが、十五
歳を

過ぎたころだったか、異様に刀に興味
を持たれてのう。

ただ珍しがられるだけならまだしも、
その刀で城中の犬や猫を切り殺し始め
た。

あまりに惨いので、お諫いさめ申し上げた
が聞き入れられなかった。

大殿に申し上げても、捨ておけとのこ
と。

我ら一同困り果てて居り申した。

或る時、御前試合があり、当藩随一の劍

客

村部尚勝むらべなおかつ（33）が八人を打ち負かした。

その功により、劍術指南役となった。

この村部を痛く気に入られた若殿は、
常時

お傍に侍らせ、稽古に余念がない。

ところがこの村部、相当な策士で、ある
刀商人を連れて来ては、名刀と称して
高額なる刀を若殿にお勧めした。

それも一本や二本ではない。

値の張る刀の代金に、勘定方も悩み果
て、

わしに相談に参った。

当然わしはお諫め申し上げたが、やは
りお聞き入れがござらぬ。

そして以前から、若君と村部が夜、城を
抜け出しておるといふ噂があり、これ
も捨ておけぬ故、伊賀者を使って、跡を
追わせた結果、二人が辻斬りをしてい
ることがわかった。

これが判明したのがひと月前。

このことが幕府に知られたらば、当
家のお取り潰しは必定。

早馬で江戸の殿に報告を差し上げたが、
暫し待てとの御沙汰。
殿のご決断を待っていては、藩の危機
は増すばかり。
それで、わしは、若殿と村部を討つこと
にした。
殿には江戸に次男の若殿様もおられる
故、
世継に困ることは無い。
これは殿の御裁可無き謀反と言われて
も仕方ない。
このことが幕府隠密に漏れば、わし
を始め足軽迄三百有余人の者どもが路
頭に迷う。
それで貴公に、若殿と村部を討つても
らいたい。
当藩に村部に敵うものはないが、どう
じや

数馬、暫く呼吸を止めていたのに

気づ

き、大息をつく。

数馬「これは、拙者には荷が勝ち過ぎまする。

まして拙者はご当家の身内ではござりませ

ん。

謹んでお断りいたしまする」

堀田「ここまで聞いて、無事城の外へ出られ

ると思うか。

断れば、そちの家族も無事では済むまいぞ」

数馬「なんと理不尽な」

堀田「もう一つ、そちが彼奴等きやつらを打たねばな

らぬ訳を話そう。

あの二人が辻斬りをする日は、新しい刀を手に入れた夜じゃった。

辻斬りのあった日と、新刀を手に入れた日が完全に符合したのじゃ。

つまりそちの子供を殺したのは、あの二人じゃ。

わかったか」

数馬、目をつぶって暫し考える。

数馬「わかりました。

お引き受けいたしまする」

○城の裏御門の内側（夜）

周囲の生垣の影に十数人の侍が潜んでいる。

その中に数馬、たすき掛けで立っている。

横には堀田家老。

堀田「（声を落として）参ったぞ」

石垣の角を回って、黒装束・黒頭巾の男が二人。

見事な拵こしらえの太刀を佩いて歩いて来る。

その二人の前に進み出る数馬。

数馬「あいや、暫く」

村部「何者！」

数馬「そこ元、村部殿と若殿とお見受け申す。

故有って、お二人のお命頂戴ちようだいい申す。
お覚悟召されい」

村部「故とは？」

数馬「以前、町家筋で子供を殺あやめたであるう。

拙者はその子の父親だ」

和興「村部、さっさと切り捨てい」

村部「はっ。

確かに子供を殺したのは我等だ。

かたき討ちとは片腹痛い。

返り討ちに致そうぞ」

と、スツと歩を詰め、刀を抜き放つ。

数馬、まだ刀を抜かない。

村部、下段から斜め上に振りかぶ

る。

やおら刀を抜く数馬。

敵の刃を交わし、上段に打ち込む。

双方の刀がふれ合い、火花が。
そして二人は離れる。
村部が上段に構え、真っ向から振り下ろしたとき、数馬は左膝を落とし、右手で刀の峰を持ち、刀を水平に構える。
村部の太刀が振り下ろされ、数馬の太刀とぶつかる。
そのとき、数馬の太刀が折れ、その瞬間、折れた残りの剣で村部の前足を切り裂く数馬。
立っていられなくなった村部、右に倒れる。
倒れたとき、右腕を地面に突き、左腕だけで刀を支える。
数馬立ち上がり、村部の懐に飛び込み、
折れた剣で喉元を突く。
そのまま血を噴きながら息絶える村部。

数馬、村部の剣を取り上げる。

数馬「若殿、見参！」

和興「へへっ、強いとう。」

されどそこまで。

お前の子ともは、太刀が振り下ろされる毎

に、泣き叫んでおったわ。

見ものであつたぞ」

数馬「犬畜生め。」

今から、我が子が切られた順番にうぬ
を切

ってゆく。

まず正面」

数馬二歩踏み出し、和興の刃を跳ね上げ、そのまま右肩から左腹にかけて一太刀。

和興「ギヤア！」

数馬「次は肺！」

深々と数馬の太刀が和興の右肺に。
血の泡を吹きながら叫ぶ和興。

数馬「止め！」

数馬の太刀が心の蔵に。

こと切れる和興。

荒い息をしながら立ち尽くす数馬。

手に持った太刀を放り投げる。

そこへ堀田現れる。

堀田「見事！」

おい、者共、二人の亡骸を焼き場に運んで

すぐ焼いてしまえ」

すでに用意した戸板を二枚運び、

その

上に亡骸を乗せ走り去る。

堀田「おい、者共、この男小国を牢に繋げ」

正親「御家老、それでは約束が」

堀田「与力の分際で差し出がましいぞ。

若殿にコレラをうつした犯人じゃ。

若殿はコレラで亡くなったのじゃ。

考えてもみよ。

家臣が五人、十人村部に切り殺され

ば、

幕府の眼を引いてしまう。

町医者の一人や二人、何ほどのことが

あろ

うか。

明朝には首をはねて、焼いてしまう」

唾然として取り残される正親。

数馬、押されるままに牢への道を。

○牢の中（夜）

板敷の部屋で一人、大の字になっ

て横

たわる数馬。

外には風の吹く音に交じり、鈴虫

の啼く声。

数馬 M 「おゆき殿、許せ。

斯か様ような仕儀しぎになり果かてて、朝には落命。

おのれ一人なら諦あきらめもつくが、そなた

や子

供たちのことを思うと悔しくてならぬ」

うつつと寝がえりを打つ数馬。
と、そのとき牢の外に人の気配。

正親「小国殿、小国殿」

小さく呼ばわる声。

数馬「む、三崎殿か」

正親「左様。

貴公を助けに参った。

さあ、出られい」

数馬「かたじけない。

されど、それでは貴殿に迷惑が」

正親「なあに、心配無用、（鍵を開け）さ

あ」

言葉に従い外へ出る数馬。

○牢の外（夜）

正親「これは、村部の持っていた刀。

ひそかに持ってきた。

貴公のは折れてしまったから」

数馬「重ね重ね痛み入る」

とそれを腰に差す。

正親「さあ、こちらへ」

ふたり、ひそかに歩き出す。

○城の裏門の外（夜）

そこには馬が一頭。

正親「小国殿、実はわしは幕府から遣わされ

た隠密じゃ。

今日昼には手勢と共に城に乗り込んで堀田を糾弾する手はず。

脱獄が知れれば、そなたの家に堀田の手のものが向かうはず。

一日だけ、家族共々避難なされ」

数馬「かたじけない」

正親、馬に飛び乗り駆けてゆく。

○数馬の家・外観（夜）

○数馬の家の中（夜）

戸を開いて入ってくる数馬。

お雪が寄ってくる。

おゆき「こんなに遅くに何があったので
すか」

数馬「喜べ。

秀の仇を取ってきた」

おゆき「まあ！」

数馬、ひそひそ声でおゆきに事の

顛末

を告げる。

数馬「わかったか。

だから今から子供たちを避難させる。

起こしてくれ」

おゆき「はい」

子供たちが、目をこすりながら起

きてくる。

数馬「おゆき殿、持っていくものは銭だけ」

おゆき「はい」

おうめ「先生、どこへ行くのですか」

数馬「おお、今宵から二晩、旅籠に泊まり

に

行く。

どうだ、うれしうだらう」

おうめ「うん」

数馬「さあ、帯を締めて」

子供たち、各々の帯を確かめる。

数馬「静かにな」

○家の外（夜）

数馬「裏道から行くぞ。

ついてまいれ」

一行は細い道を右に左に。

○旅籠・京屋の裏（夜）

一行が木戸のところまで辿り着く。

奥の縁側で待っていた宿屋の主人

甚兵

衛が駆け寄ってくる。

甚兵衛「お待ちしておりました。

どうぞこちらへ」

と庭の先の離れへ案内する。

行燈がすでに灯っている。

○同・離れの中（夜）

すでに布団が人数分敷かれている。

数馬「面倒懸けた。

有難う」

甚兵衛「なんの。

先程のお話で、御投宿は秘密にしておりま

すので、ゆっくりお休みください。

では」

と一礼して去ってゆく。

T 一か月後

○数馬の家（朝）

数馬、庭の野菜を見に出てくる。

家の角を曲がったところで、浅太

郎と

おひさが抱き合っているところを

見て

しまう。

驚いてすぐ身を隠す数馬。

足音を潜めて、井戸のところへ戻

って

来て、洗濯をしているおゆきに声

を掛

ける。

数馬「おい、そなた、浅太郎とおひさのこ

と、

なにか気づいているか？」

おゆき「はい、あの二人は、好き合うてお

り

ます」

数馬「なんと！」

おゆき「ご存じなかったのですか」

数馬「いや、知らなんだ」

おゆき「そちらの方面は不得手なのです

ね」

数馬「不得手も何も、あの二人は兄、妹」

おゆき「血は繋がっております」

数馬「それはそうだが・・・」

おゆき「子供の出来ぬうちに夫婦めおとにしてやり

ましょう」

数馬「そのほうが良いのかの」

おゆき「良いもなにも、好き合うた二人で
ございましょう。」

あなた様と私のように」

数馬「むっ、返す言葉が無い。

そうじゃの、そうしよう」

おゆき「二軒先に空き家がございます。

そこを新居にしてやって、おひさには
そろばんの塾を始めさせるのがよろし
かろうと存じます」

数馬「なんと、そこまで思案していたのか。

実に見上げた女子おなごよなあ、そなたは」

ニコツと笑うおゆき。

そこへ門から正親が入ってくる。

数馬「ああ、三崎様、ご無事で」

正親「おお、やっと片付いたわ。」

新しい藩主も到着した。

もう拙者が出る幕は無いわ」

数馬「ご苦勞様でした」

正親「貴殿にも迷惑を懸けた。

許せ」

数馬「なんの。

それでこれからどうなさるので」

正親「妻子の待つ江戸へ帰る。

これでさらばじゃ」

数馬「それはお名残り惜しいことで」

正親「もう会うこともあるまい。

達者での」

数馬「あなた様も」

正親「さらばじゃ」

そういつて家を出てゆく正親。

その後深く頭こっぺを垂れる数馬。

終わり

